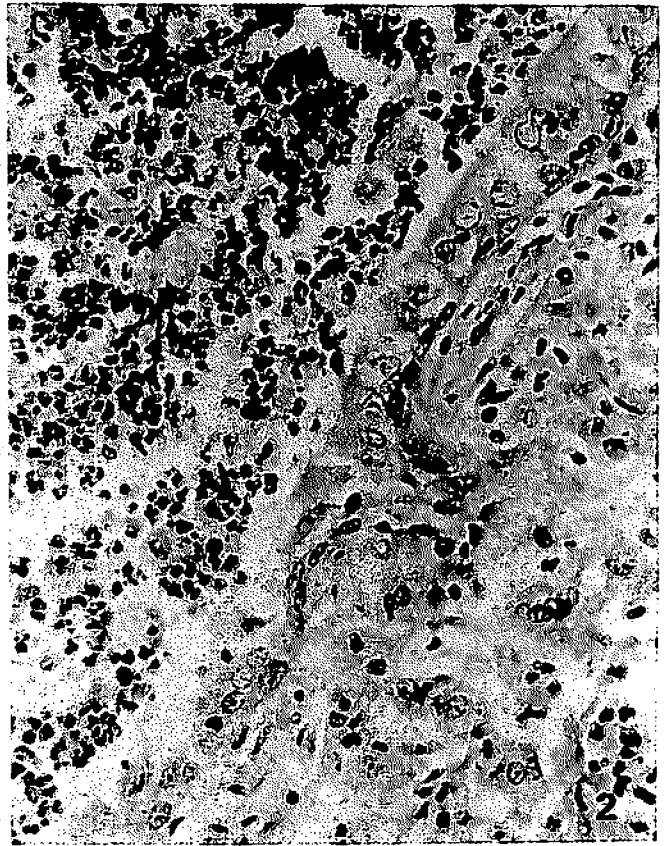
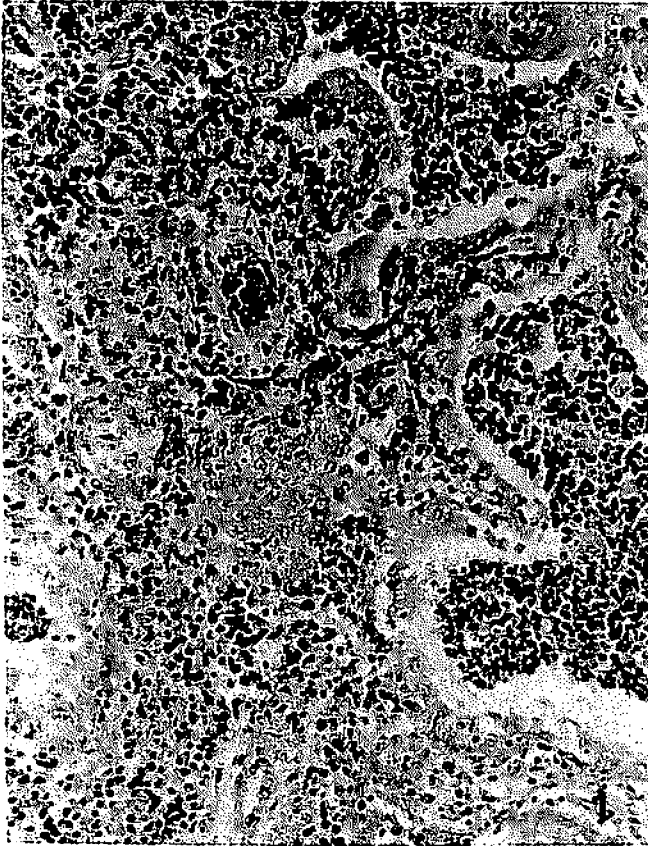


# ネコの扁平上皮化生を伴う肺炎

山口大学農学部家畜病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.326



動物：日本ネコ，雌，8才，体重3.5kg。

臨床事項：2年前に避妊手術を行って以来一般状態わるく、最近、尿失禁がみられるようになったので、畜主の希望で安楽死させた。手術当時、頸部周囲に粟粒大～小豆大の小腫瘤が多数みとめられ、一部切除したが、まだ多数残存している。

肉眼所見：肺は全葉淡赤色～暗赤色で、米粒大～小豆大、灰黄色、中等度の硬さの結節が各葉に散在、表面より軽度膨隆していた。剖面でみると、この結節は細気管支を中心に形成されていた。皮膚の小腫瘤は球状で硬く、内部は白垂状物で満たされていた。

病理組織学的所見：病変は肺胞中隔の水腫性肥厚と好中球浸潤、細気管支壁の肥厚と少数の骨髄球様細胞を含めたリンパ球様細胞の瀰漫性細胞集簇、細気管支および呼吸細気管支上皮の扁平上皮化生に大別され、このうち、前二者は慢性増殖性気管支肺炎像と考えられた。扁平上皮化生は呼吸細気管支の、とくに、繊毛上皮から柱状上皮に移行する部分で著明にみられた(Fig.1)。この繊毛上皮部は、通常は、単層繊毛上皮からなっているが、扁平上

皮化生がおこっている部分およびその周辺では一層あるいは二層の扁平上皮細胞が粘膜の基底部分近に出現していた(Fig.2)。この細胞は次第に重層化して粘膜細胞にとってかわり、扁平上皮に移行する、いかえれば扁平上皮化生がおこることがみとめられた。

この基底部に現われる扁平な細胞は、この部分より上部の気管支に通常みられる基底胚芽細胞で、胎児あるいは新生児では気管支の表面を覆い、以後、繊毛上皮あるいは柱状上皮に分化すると考えられている。このような扁平上皮に分化する潜在能力を有する細胞はビタミンAの影響を受け、その欠乏により増殖することが知られている。

今回のネコの例でも、肺以外に膀胱・腎盂粘膜上皮および膀胱管上皮に扁平上皮化生がみられ、また、頸部周囲の腫瘤も毛嚢上皮の過角化によるものであることが確かめられ、いずれもビタミンA欠乏症にみとめられている変化とよく一致した。

診断：ビタミンA欠乏による扁平上皮化生を伴った慢性増殖性気管支肺炎。